

芦屋大学論叢 第79号
(令和5年7月29日)抜刷

《研究ノート》

現代日本の高等学校農業科における
「社会に開かれた教育課程」の一考察

—兵庫県立農業高等学校の事例(1)—

山 片 崇 嗣

《研究ノート》

現代日本の高等学校農業科における 「社会に開かれた教育課程」の一考察

－兵庫県立農業高等学校の事例(1)－

山片 崇 嗣

芦屋大学経営教育学部特任准教授

1. はじめに

これからの日本の教育において、文部科学省が主要な教育実践目標として掲げる「主体的、対話的で深い学び」はその定着が急務となっていることは周知である。加えて、同省は、社会的な実践と教育活動の場をつなげていく「社会に開かれた教育課程」の確立の重要性も提起している。(中央教育審議会答申, 2016)¹⁾

その二つの課題の実現と定着が急務となっている現在、筆者は戦後直後の日本に設立された「学校農業クラブ」の教育現場において、実はすでにそれらの二つの課題が同時に実践され、定着しつつあったのではないかと推測した。その仮説を裏付けるべく、「学校農業クラブ」の創設の過程と、その教育目標、さらに実践内容などを当時の農業クラブの機関誌や各県の学校史などから考察した。さらに、当時の教員、生徒たちが残した回想録や手記などの資料にふれ、「主体的、対話的で深い学び」及び、「社会に開かれた教育課程」の二つの課題が同時に効果的に定着しつつあったことを明らかにすることができた。(山片, 2022)²⁾

他方、筆者はコロナウィルス感染症が終息し、再びグローバル化が急速に加速するであろう今後の日本において、政治、産業、教育といったあらゆる分野で海外諸国に後れを取らず、国力をさらに高め、かつ、その力を恒久的に持続させるための仕組み作りは教育に大きく依存するのではないかと考えている。したがって今後の教育においては国内のみならず、世界的に影響力を持ち、活躍できるリーダーの育成が急務な課題となるのではないかと考える。

また、昨今、各地域で育った有能な人的資源が地元から流出し、活躍の場を求めて首都圏に集中してしまう傾向が顕著となっている。加えて非常に優秀な人材は首都圏にとどまらず、海外に流出していく事例も深刻な問題として危惧されている。「社会に開かれた教育課程」を実現するためには各地域で培った技術、知識、経験など、卓越した技能を習得した多くの人材が地元で拠点を置きながらその能力を国内外で発揮することができ、同時に地域の産業や教育といった広い分野で活躍、貢献できるような視点や仕組み作りが重要になるのではないだろうか。そういう意味では、筆者は主体的な学びや、「社会に開かれた教育課程」の定着は日本においても非常に重要な教育目標となると信じている。

したがって、本稿では先述したように、主体的な教育実践と地域貢献とを両立していた、戦後の「農業クラブ」の教育実践の場を前身に持ち、現在でもその精神を引き継いで教育実践に挑んでいると考えられる、兵庫県立農業高等学校(以下、「県農」と呼ぶ、「県農」は現在、愛称となっている)にヒヤリングと資料調査を実施した。県農は県下でも農業実践の基幹校として長年の歴史と実績があり、県内で戦後いち早く「農業クラブ」を併設した経緯がある。

一方で、現在の農業高校は、生産農家の減少と農業用地の過疎化に伴い、以前のような大きな教育施設規

模や学生数は確保できておらず、全国的に統廃合が進み、農業科を設置する教育機関の数は減少している。加えて、入学希望者の減少にともない、農業科単独で学校を維持、存続することは非常に困難となってきた背景があり、農業高校という校名を変更し、地域のニーズに合った形で存続、運営しているのが現状である。県農もその煽りを例外なく受けている現状がある反面、「農業高等学校」という校名を持つ教育機関であることから筆者は県農が研究対象としては非常に重要であり、また注目に値すると考えた。

したがって、本稿では県農の現職教員からヒヤリングを通じて教育内容を検証し、戦後の「農業クラブ」の精神を引き継いだ教育実践が今でも残存、継続しているのか、また、農業高校の教員としての教育観や苦悩、挑戦といったことを検証したい。ヒヤリングを通じて、現在県農が取り組む社会・地域貢献と、その実践過程で抱える諸課題とその解決策などについて、知りえた事例を考察し、これを基礎研究としたい。その考察は、筆者のこれからの研究の主軸となる、主体的な学びと、「社会に開かれた教育課程」を両立する教育実践の模索、そしてその実現の一助となるものであると疑わない。

2. 聞き取り調査

県農に調査に赴き、過去の学校史や農業クラブに関する資料をたくさん閲覧することができた。調査当日(2023年5月12日、金曜日)、学校に到着すると、すぐに松本宗弘教頭先生が出迎えてくださり、筆者が訪問した時には、すでに主な研究対象となる資料は、会議室にまとめて準備してくださっていた。聞き取り調査では約一時間半、お時間を頂戴し、県農の歴史と、農業クラブの教育的意義など、貴重なお話を伺うことができた。本研究では松本教頭先生からヒヤリングを経て明らかになった農業科独特の教育方法や現状の課題、さらに今後取り組もうとしている試みなど、詳しくご教授いただいた内容について報告、考察する。

県農は現在、農業科、園芸科、動物科学科、食品科学科、農業環境工学科、造園科、生物工学科、と7つの各学科を持ち、各学科にそれぞれ実習棟、圃場を保有している。また定員は各学科20名で同数であり、学科ごとに魅力的な実践・実技授業が用意されており、実習科目も充実している。また生徒が主体的に運営する自治活動や学園祭などが活発に行われている。学校食堂も地域の名産品などを使用したメニューが並んでいるという。

まず、以下に県農の学校案内より一部を抜粋し教育目標などを示しておく。

教育目標：校訓「ゆたかな情操 たゆまぬ研鑽」

基本方針：校訓「ゆたかな情操 たゆまぬ研鑽」の精神を基調に、21世紀の日本の担い手としての自覚と、豊かな創造性及び人間愛の精神を持ち、自らが主体的に判断し、行動できるころ豊かな人材育成を目指す。

スクールポリシー：

1. 育成を目指す資質・能力に関する方針（グラデュエーション・ポリシー）

育成を目指す人物

「たゆまぬ研鑽」：社会情勢の変化に対応できる基礎・基本を有し、自主・自立の精神と積極的な実践力を持ち、その努力を続けられる人。

「農業の学び」：広い知識・技術と科学的な経営能力を持ち、人と自然の調和した環境づくりに貢献できる農業のスペシャリスト。

2. 教育課程の編成及び実施に関する方針（カリキュラム・ポリシー）

基本方針：

「兵庫が育むところ豊かで自立する人づくり」を推進するために、参画と協働による「学校・家庭・地域が一体となった県農づくり」を基調に、地域社会を先導し、魅力と活力のある「未来への道を切り拓く力」を育成する。

教育課程の編成及び実施に関する方針：

- ・個に応じた学びと協働的な学びを組織的・計画的に推進するとともに、評価方法を研究し、教育課程を充実させる。
- ・地域の農業環境を教材とし、人と自然の調和した持続可能な農業実践から学ぶ。

(2023 学校案内)³⁾

上記の教育方針からは、主体的な学びと地域に根差した教育課程を実践しようとする趣旨や姿勢がよく伝わることが見て取れるのではないだろうか。

2-1. 教育現場の苦悩

松本先生はご自身が県農の卒業生であり、畜産科のご出身であった。松本先生の在学当時から農業科に在籍する学生は他学科に比べて多いわけではなかった。現在も募集定員は全学科同じ定員数である。農業高校といえども、決して農業科が突出しているわけではなく、多種多様な学科を用意し、学校に魅力を持たせていることがうかがえる。

現在、県農の生徒の約50%が近隣の自宅から通学しており、以前のように、他府県から入学する生徒の割合は年々少なくなっているが、一方で年々女子生徒の割合は増えている傾向がある。その主な理由は、動物科学科に愛玩動物を扱う過程があること、また女子学生に人気がある、牧場、動物園、盲導犬育成などを実習先とし、卒後後も関連分野先に就職、進学する女子生徒が増加していることがその要因と考えられる。しかしながら農業そのものに従事する、生産農家のご子息、ご息女は、以前に比べると激減し、また農業科を希望する学生数もかなり少なくなっている。

課題としては、継続的に専門性を深めるために大学に進学する生徒の割合は20~30%と低く、また進学を含めて優秀な人材は県外に流出していく傾向にあることである。また、学生が卒業後、高校で学んだことを活かせるような進路選択を必ずしもなされているわけではない、という現実にも課題を感じておられる。いいかえると、現代の社会情勢に伴い、情報・IT・AIといった分野を学ぼうとする学生が増加する一方で、農業や畜産といった分野に対する興味関心や重要性を感じる生徒が減少している状況を現場レベルでも実感しているのではないだろうか。これは地域資源に大きく依存する第一次産業の衰退を意味しており、若者はそこに魅力や将来性を感じることがなく、地場産業や地域社会に根差したライフサイクル循環が大きく欠落しているともいえるのではないだろうか。

2-2. 主体的、対話的な実践

実習と座学との割合は50%ずつで実技科目を重視している。特に実習教科においては生徒が主体的に学ぶことを教育目標に置いており、自ら考え、課題を見つけ、解決策も導き出す素地を学ぶことに注力している。筆者の「アクティブラーニング」的な要素を意識しているのか、という問いに対して松本教頭先生は、「まさにそこを意識している」とのことであった。またその修学姿勢は、昔から県農に受け継がれている教

育実践目標となっているようである。

これは、現在、中等教育現場において圧倒的な割合を占める、普通科の教育実践とは一線を画しているように感じた。現在、中等教育において、特に高等学校は、大学進学のための補習的な役割を担っているといっても過言ではないのではないだろうか。その大きな要因は、社会のニーズが圧倒的に大学進学に傾いていることに起因しているように思う。

しかし、社会の大きな流れやニーズにはそぐわないかもしれないが、県農のように、実習や実験型の授業を重視したカリキュラム編成は、生きる力を育み、個人の考え方に自ら磨きをかけ、また自ら課題を見つけ、協働的に解決策を講じて、より良いものを形にしていく、という主体的な教育そのものではないだろうか。

2-3. 自己鍛錬・表現の機会が多い

普通科といった一般的な教育課程のもとで学ぶ生徒に比べ、特殊ではあるが、他校と共通した修学内容に関連する分野で、様々な大会や研究、実践発表会の場が県内のみならず、全国レベルで用意されている。

すなわち、挑戦の場が多い、ということである。挑戦の場が多いことで明確な目標設定とその目標を成就するためのタスクが具体的にかつ、時系列的に可視化され、またグループ研究では、協働的な作業が要求される。この協働作業の一連の過程では「リーダーシップ」、「多様性」、「責任感」などを体験的に、また効率よく学ぶことも可能になるのではないだろうか。共通する研究分野で自ら課題を見つけ、協働的に探究する過程を通じて自己のポテンシャルを引き上げていく場が教育過程内に設定されていることになる。

2-4. 「農業を」学ぶのではなく、「農業で」学ぶ

松本教頭先生のお話の中で、一番印象に残り、これからの教育において重要な要素になるのではないかと感じたことは、時代の流れとともに、AIやオートメーション技術が導入され、これまで必要とされてきたものが、どんどん不要になってきていることは、肌身をもって感じてはいるが、しかし、いくら技術が発展し、農業にAIやドローン、GPSといった最先端の技術が投入されたとしても、農業に対する基本的な考え方は、いつの時代になっても変わらない、といった趣旨のことを強く語っておられたことである。重要なことは「農業を」学ぶのではなく、「農業で」考え、学ぶという姿勢が重要であるような気がする、といわれたことが筆者にはとくに印象的だった。

このことを言い換えると、革新していく農業技術は深い学びや探求のための一つのツールとしてとらえ、そこからさらに発展させた深い学びを獲得していくことが重要である、ということではないだろうか。真の教育目標は普遍的で、時代の流れや変化によって左右されるものではない、とおっしゃっているように感じた。

このことはまさに深い学びを育む素地が目の前の学習に豊富に用意されており、最先端の技術そのものや、その使用法を学ぶのではなく、眼前にある教育目標に向かって、どのような技術を駆使することが有益なのか、すなわち、課題解決策の方法論そのものを導き出させようとする考え方で、今の日本の教育に欠落しているもののうちのひとつである、ということにはならないだろうか。

2-5. 地域との連携

松本先生はお話の中で、近隣の農業の衰退を危惧し、県や民間と協力して共同研究を実践していることについて一つの事例を挙げられた。もともとその周辺の農業は大麦の栽培が多い地域でもあったことを鑑み、枯れた畑に大麦の栽培を普及させ、その大麦を使用した製品開発を県農と共同で実践している。その製品は

「大麦ドレッシング」といい、大変おいしいものであるらしい。好評で今後、さらに採算が見込めるよう、大麦栽培技術の向上とドレッシングの製品改良に取り組んでいる。これがうまくいけば、地域に大麦の生産農家が増え、また以前のように農業が活性化するのではないかと期待をしていた。まさに産学協同事業の実現を目指すものである。

こういった試みは、最近、他府県でも実践されている。例えば2018年に福井県立若狭高等学校海洋科学科の生徒たちが研究開発したサバ缶が、宇宙航空研究開発機構（JAXA）から、高校生としては初めて「宇宙日本食」に認証された。学校がある福井県の小浜はサバが有名で、「小浜の優れた水産加工技術を世界に伝えたい」という生徒たちの思いから始まった「宇宙日本食サバ缶プロジェクト」である。彼らの最初の構想から実用化に至るまでには5年以上の歳月を費やしたが、その試みに関わった高校生は、今ではさらに専門知識を育みたいと、研究職に進んだ生徒もいれば、その研究が楽しく、意義深いものだったので、今度は自分が指導者となって、生徒たちにゼロから世界に通用する技術を開発する喜びを実感してほしいと、教員になった生徒もいるという。彼らは全員当時のことを振り返り、当時の様々な経験はいいことばかりではなかったが、その経験自体が今の人生に大いに役立っているし、今後もこの経験をもとに、様々な逆境を乗り越えられると思う、と語っている。

この事例はまさに、地域と生徒がともに発展し、さらに、そこで育った生徒が地域のみならず、世界に貢献できる人材へと成長したことに他ならない。いいかえると、若者が学校教育を通じて明確な目標を持ち、地域との協働活動を通じて、世界に通用するものを生み出していき、地域にとって次の世代にさらなる発展を助長するための仕組みが構築されたという事例である。

3. おわりに

今回の研究報告では、兵庫県立農業高校が、農業を通じて、これまでも、そして今も「主体的、対話的で深い学び」及び、「社会に開かれた教育課程」という課題に対して一定の成果を上げていることを推測できるものであった。また、松本教頭先生は、こういった一連の学習や研究に対する姿勢そのものは、今も昔も変わらない、と明言されていた。また、その教育実践は学校案内³⁾からも推測できる。一方で、この取り組みは、普通科と違い、農業高校であるが故に、実践できうる教育内容であるようにも感じる。今後このような実践が全国的に広がり、農業科に限らず、全学的に実践されていくことを願わずにはいられない。

一方、本稿で取り上げた内容は松本先生からのヒヤリングに基づいた現状の教育実践の検証であり、訪問当日行った資料調査ではたくさんの学校史や農業クラブに関連する過去の資料を閲覧した。今後それらの資料を確認、整理、検証し、戦後直後の日本の学校農業クラブの実践が、今もなお、県農に受け継がれていることを証明し、今後の日本の教育に必要なものをすでに農業クラブでは実践していた可能性があるということ进行を明らかにする一事例として、さらに兵庫県立農業高等学校の実践を検証したい。

加えて今後は、県農に限らず、他府県からさらに多くの過去の農業クラブに関連する教育実践のサンプルを収集、検証してはじめて筆者の仮説が正しいものであった、といえるものになることは、十分心得ている。

【参考・引用文献】

- 1) 中央教育審議会答申(2016) 第197号,『幼稚園, 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について』.
- 2) 山片崇嗣(2022),『「社会に開かれた教育課程」の可能性ー戦後の「学校農業クラブ」の実践に学ぶー』, 芦屋大学論叢 第78号.
- 3) 兵庫県立農業高等学校 2023 学校案内より抜粋.